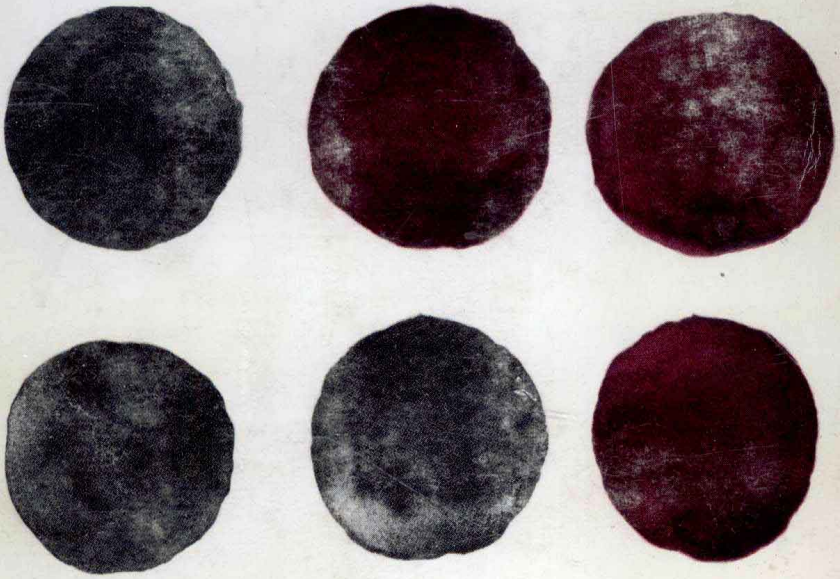
新しい世界の文学



友だち

ジョン・ノールズ
須山静夫訳

白水社

訳者略歴
一九二五年生
一九五四年明大卒
アメリカ文学専攻
明大教授
主要訳書
スタイロン『闇の中に横たわりて』
フォークナー『八月の光』
オコナー『賢い血』

新しい世界の文学 57
友だち

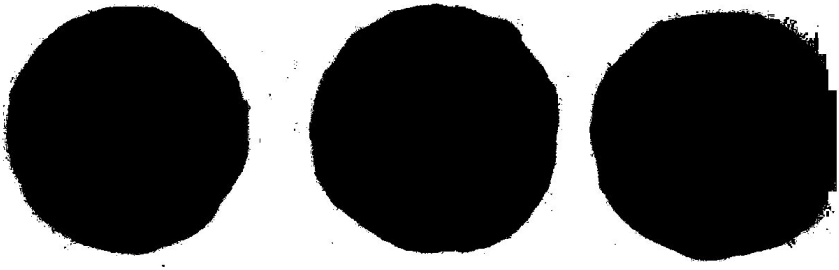
一九七二年八月一〇日第一刷発行
一九七五年一一月二五日第四刷発行

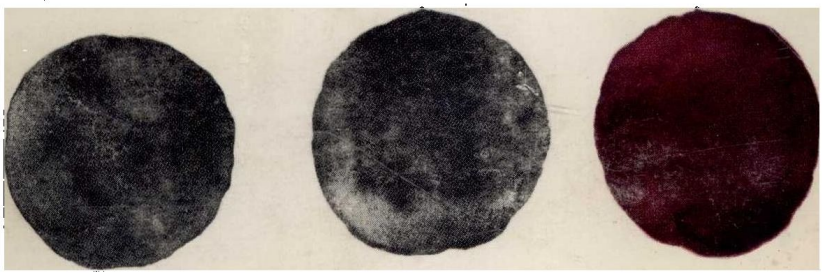
訳者 © 須山静夫
発行者 寺村五一
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京三三二一八
郵便番号一〇一

理想社印刷・黒岩製本

(分) 0397 (製) 76571 (出) 6911

しい世界の文学

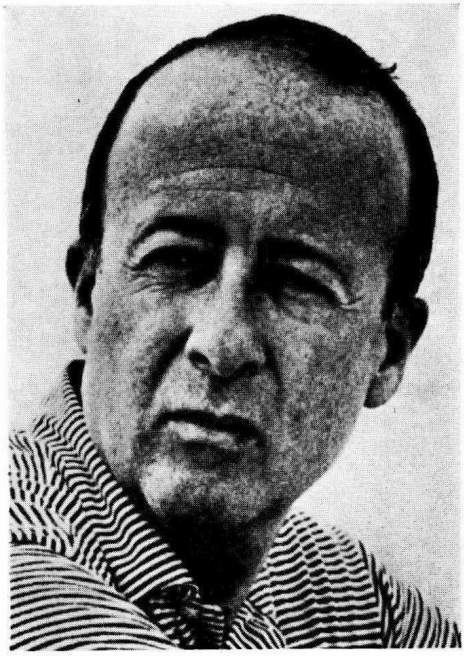




友だち

ジョン・ノールズ
須山静夫訳

白水社



友だち

ジョン・ノールズ
頃山静夫訳

白水社

新しい世界の文学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

ビアとジムに

感謝と愛をこめて

1

ぼくはしばらく前にデヴォン校を再び訪れ、十五年以前にぼくがそこの生徒であったころよりも学校が奇妙に新しく見えることに気づいた。ぼくが記憶しているよりも落ち着いているように見え、窓の幅は狭くなり、建物の垂直の線は昔よりも目だち、堅苦しく締めつけられたようで、木造の部分は以前より光っていて、保存をよくするためにすべてのものにワニスの上塗りを施したのかと思われた。しかし、もちろん、十五年前には戦争が行なわれていた。おそらくその当時は学校の維持はあまりよく行き届いていなかったのだろう。おそらくワニスも、ほかのあらゆるものといっしょに戦争に駆り出されていたのだろう。

ぼくはこの光沢のある新しい外観が必ずしも好きではなかった。なぜなら、そのために学校が博物館のように見えたし、じっさいぼくにとって学校はまさに博物館であったのだが、ぼくはそうあって欲しくないと思っていたからだ。感情のほうが思考よりも強くなるような深みで、暗黙のうちにぼくが常々感じていたところでは、デヴォン校はぼくが入学した日に初めてこの世に生まれ、ぼくがそこの生徒であったあいだは活気にあふれた実在のものであり、それ

からぼくがそこを去った日に蠟燭の炎のようにゆらめいて消えたのだった。

しかし、やはり学校はここにあった。だれか思慮深い人の手でワニスと蜜蠟を塗られ保存されていた。どこかの閉めきった部屋の澱んだ空気のように、校舎といっしょに、昔の日々の生活を取り巻き満たしていたあのよく知られた恐怖感も保たれていた。その恐怖感は当時の生活のすみずみにまで満ちていたので、在学中のぼくはそれがそこにあることに気づきさえしなかった。というのは、恐怖感がないこと、恐怖感がないとはどのようなことか、ぼくはそれを知らなかったので、恐怖感の存在を確認することもできなかったからだ。

今、十五年の星霜を通して振り返ってみると、ぼくは自分の生活を取り巻いていた恐怖をきわめてはっきりと見きわめることができた。つまり、ぼくはこの年月のあいだに非常に重大な仕事に成功したことになるに違いなかった。ぼくは恐怖から脱出したに違いないのだ。

ぼくは恐怖のこだまを感じ、それとともに抑えきれない混沌とした歓喜を感じたが、その喜びは恐怖の伴奏であり、裏側の顔でもあった。それは、暗澹たる大空にひろがる北極光のように、あのころ時おり湧き起こった歓喜だった。

ぼくが見たいと思う場所は二つあった。どちらも恐ろしい場所だったが、だからこそぼくはその場所を見たかった。そこで、ぼくはデヴォン・インで昼食をすませてから学校のほうへ戻って行った。冷え冷えとした何とも言いようのない季節で、十一月の末に近く、土の一片一片がはっきりと見える濡れた、みじめな十一月の日だった。幸いなことにデヴォンにはそうい

う天候はまれだった。体を締めつけ凍えさせる厳冬の寒さと、ニューハンプシア州のまばゆいばかりの夏とがむしろデヴォンの特徴だった。しかし、この日はぼくの周囲に湿気を帯びた陰気な突風が吹き荒れていた。

ぼくは町のいちばん立派な通りであるギルマン・ストリートを歩いて行った。家々はぼくが覚えているとおりに端正で風変わりだった。古い植民地時代の牧師館を巧みに現代ふうに改造した家や、ヴィクトリア朝式の木造の増築した建物や、ギリシア復古調の広壮な寺院が通りに沿って並び、以前と同じように厳かであると同時に無気味だった。ぼくはだれかがそれらの建物にはいるのをめったに見たことがなかったし、だれかが芝生で遊んでいるのも、窓が開いているのも見たことがなかった。この日は、蔦が枯れ、裸になった木々が悲しく呻き声をあげているので、家々はいつもよりいっそう優雅で、また生命を失ったもののように見えた。

すべての古い名門校と同じく、デヴォン校も塀や門の後ろに孤立しているのではなく、この学校を生み出した町から自然に現われ出ていた。だから、ぼくが学校に近づいて行ったとき、にわかな邂逅の一瞬というものはなかった。ギルマン・ストリートに面している家々がしだいに守勢を見せ始めた。それは学校が近いということだった。それから家々はもっと力尽きたように見えた。つまり、ぼくは校内にはいったのだった。

まだ午後の早い時刻だったので、校庭にも校舎にも人影はなかった。みんなが運動に出て行ったあとだったからだ。ぼくは何ものにも心を悩まされずに、ファー・コモンと呼ばれてい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

る広い中庭を通り抜けて、ある建物のほうに進んで行った。それはほかの大きな建物と同じように赤い煉瓦造りで、均整がとれていたが、大きな円屋根と鐘と大時計があり、出入口の上にラテン語が書いてあった。第一校舎である。

ドアを押してぼくは大理石の玄関にはいり、ずっと上まで続いている白い大理石の階段の下で立ちどまった。その階段は古かったが、各段の中央にすり減ってできた月形の跡はあまり深くなかった。この大理石は異常に堅いに違いなかった。確かにそうに違いなかった。しかし、ぼくはこの階段のことを今までいつも考えていたにもかかわらず、類まれなこの堅さには思いも及ばなかった。このこと、この重大な事実をぼくが見のがしていたことは驚くべきことだった。

ほかに注目すべきものはなかった。もちろん、その階段はぼくがデヴォン校在学中に毎日少なくとも一度は昇ったり降りたりしたのと同じ階段だった。その階段は以前と変わっていなかった。それでは、ぼくはどうだ？　そう、ぼくは当然昔より年取ったと感じていた。ここでぼくは自分の回復がどのくらい進んだかを見きわめるために情緒的な検査をし始めた。ぼくはこの階段に比べると前より背も高く、だいたいにおいて体も大きくなっていた。亡霊たちがぼくといっしょにこの階段を昇ったり降りたりするように思われたころよりも、ぼくは裕福になり、成功もおさめ、《安定》を得ていた。

ぼくは踵を返して外に出た。ファー・コモンにはまだだれもいなかったので、砂利を敷いた

幅の広い道をひとりで歩き、樹木のうちで最も共和党的な、銀行家ふうなあのニューイングランド産エルムの木のあいだを通って、学校の奥のほうへ向かった。

デヴォン校は時としてニューイングランドで最も美しい学校であると考えられていて、この日の陰鬱な午後にさえも、その力は明らかに表われていた。それは秩序整然とした小さな各区分の美だった。大きな中庭、一群の木立ち、よく似た三棟の学寮、輪になって並んでいる古い家々——それらが互いに競い合いながらも調和を保っていっしょに生きているのだ。いつまた争いが始まるかもしれないと感じられたし、事実、それは始まっていた。正真正銘の植民地時代ふうの建物である補導部長宿舎から今は、大きなむき出しの一枚ガラス張りの窓がついた増築部が突き出ていた。やがて補導部長はおそらく四面がガラスの家に完全に閉じ込められて生活し、ひどく楽しく暮らすだろう。デヴォン校ではすべてのものがゆっくりと変化し、その前にあったものとゆっくり調和するのだった。校舎や補導部長やカリキュラムがそういうことを成し遂げられるからには、ぼく自身もこの成長と調和とを成し遂げることができる、いや、たぶん自分では知らないうちにすでに成し遂げたかもしれない、と望むのは論理にはずれていなかった。

そのことについては、ぼくが見に来た二番目の場所を見たときにもっとよくわかるはずだった。だから、ぼくは葉の落ちつくした蔦(つた)が蜘蛛(くも)の巣のようにまつわりついている均整のとれた赤い煉瓦造りの学寮のわきをぶらぶらと歩き、百メートルも構内に侵入している今にも崩れそ

うな町の突出部のあいだを抜け、この時刻には生徒でいっぱいになっているのに外側は記念塔のように静まりかえっている強固な体育館の前を通り、《檻》と呼ばれている運動具倉庫――ぼくがデヴォン校での最初の数週間を過ごしたころ、だれかが《檻》のことを口にすると、それが全く秘密の場所のようで、ぼくはきっとそこで厳しい刑罰が行なわれるに違いないと思ったことを今思い出した――その運動具倉庫を過ぎて、《運動場》として知られている大きな広々とひらけたところに着いた。

デヴォン校は勉学も運動も両方とも盛んだったから、運動場は広く、今のような時季を除けば、いつでも使用されていた。今、運動場は生気がなく、人影もなく、ぼくの立っている場所からはるか遠くまでひろがっていた。左手には寂しいテニスコートがあり、中央にはフットボール、サッカー、ラクロッス（ホッケーに似た一種の打球戯）用のフィールド、右手には森がひろがり、遠い端には小さな川があった。こんなに離れたところからでは、その川は土手にはえている数本の裸の木でそれと知れるだけだった。この日は靄（もや）の立ちこめた灰色の日だったので、川の向こう側は見えなかったが、そこには小さなスタジアムがあるのだった。

ぼくはフィールドを横切って、重い足取りでその長い距離を歩き始め、しばらく行ってから柔らかにぬかるんだ土に注意を向けた。町の中で履くためのぼくの靴は泥のおかげで破滅に瀕していた。運動場の中心近くに泥水が浅くあちこちにたまっていたので、ぼくはそこを迂回しなければならず、もはや靴とは見えなくなった靴を泥から引っぱりあげるたびに、靴は不快な

音を立てた。さえぎるものがないので雨を含んだ風が時おり激しくぼくに吹きつけた。ほかの時だったならば、ぬかるみと雨の中をむりやりに歩いて行く自分が馬鹿のように感じられただろう。しかも、たった一本の木を見るためにだ。

川の上には少し霧がかかっていたので、ぼくはそこに近づくにしたがって、自分が川とその岸辺に立っている二、三本の木以外のあらゆるものから隔絶されるのを感じた。風はここではいっそうひっきりなしに吹き、ぼくは寒さを感じ始めていた。ぼくはふだんから帽子をかぶらなかったうえに、この日は手袋を忘れてきていた。数本の木がわびしく梢（こずえ）を霧のなかに伸ばしていた。そのうちのどれかがぼくの捜している木に違いなかった。ぼくの目的の木と同じような木がほかにもここにあるとは信じられなかった。ぼくの記憶のなかでは、その木は、川の土手を見おろす一本の先の尖った巨大な釘のように突っ立って、大砲のように恐ろしく、豆の茎のように背が高かった。しかし、ここにはばらばらに散らばった木立ちがあるだけで、そのなかに特別に雄大な木は一つもなかった。

ざらざらした表面がぐしょ濡れになった草のなかを歩きながら、ぼくは一本一本の木を子細に調べ始め、ついに捜している木を突きとめた。幹に沿って昇っている小さな傷跡と、川の上に延びている大枝と、そのすぐそばに出ているもう少し細い枝とが証拠だった。これがその木だった。そしてそこに立っているその木は、ぼくにとってあの大男たち、ぼくらが幼年時代に想像した巨人たちに似ているように思われた。ぼくらが何年もたってからその巨人たちに出会

うと、ぼくらが成長したのに比べて彼らが小さくなっているだけでなく、彼らが老齢のために縮んで絶対的に小さくなっていることを発見するのだ。ぼくらが反対のほうに目を向けているあいだに、昔の巨人たちはこうして二重に位をさげられ、小人になってしまっているのだ。

その木は寒い季節のせいで裸になったばかりでなく、年老いて疲れ、衰弱し、乾いたように見えた。ぼくはその木を見たことをありがたく思った。たいへんありがたく思った。やはり、物事は同じでいればいるほど、結局いっそう変わることになるのだ。それが同じであればあるほど、それはいっそう変わる（ショーズ・プリュ・サ・シャーンジュ）（フランスの小説家、アルフォンス・カール（一八〇八―一八九〇）の言葉をもじって逆の意味にしたもの）。（プリュ・セ・ラ・メーム）永久不変なものは何もない。木も、愛も、暴力による死でさえも永久不変ではない。

今は昔と変わったぼくは、ぬかるみを通ってもと来たほうへ戻った。ぼくはずぶ濡れだった。だれが見ても、もう雨から抜け出たほうがいい時だった。

その木は巨大だった。川岸に立って、怒っている鋼鉄のように黒々とした尖塔だった。ぼくはその木に登ろうなどと思ったこともなかった。とんでもないことだった。フィニアスのほかにはだれもそんな馬鹿げたことを考えつかなかった。

彼はもちろんその木に登るのを少しもこわいと思わなかった。こわいと思おうとしなかったか、あるいはこわくてもそれを認めようとしなかった。フィニアスとはそういう少年なのだ。

「この木でぼくがいちばん気に入っていることはな」と彼は催眠術師の目と同じような力を

もっている特有の声で言った。「ぼくの気に入ることは、そいつに登るのが全く造作ないということだ！」彼は緑色の目をさらに大きく開いて、彼らしい狂気じみた目つきでぼくらを見た。幅の広い口に作り笑いを浮かべ、軽く前に突き出ている上唇がおどけているので、ぼくらにはやっと彼が完全に気が変になっているのではないとわかった。

「そんなことがいちばんきみの気に入ることなのかい？」とぼくは皮肉に言った。その夏ぼくはいろいろなことを皮肉に言った。それは一九四二年、ぼくが皮肉になった夏だった。

「エーイアー」と彼は言った。この奇妙なニューイングランドふうの肯定――おそらくそれは《aie-huh》と綴るのだろうが――それはフィニーが知っているようにいつでもぼくを笑わせたので、ぼくは笑わなければならなかった。笑うとぼくはあまり皮肉でもなく、あまりこわくもなくなった。

ぼくたちのほかに三人のものがいた――そのころフィニアスはほとんどいつもホッケーのチームと同じくらいの人数のグループを作っていた――そして彼らは不安を顔の奥に隠して彼から木へ視線を移して立っていた。高く聳えるその木の黒い幹には荒削りの木の横棒が何本も打ち付けてあり、それが頑丈な一本の大枝まで届いていて、その大枝はずっと水のほうに延びていた。この大枝に立って力の限り遠く外側へジャンプすると安全に川のなかに飛びこむことができた。ぼくらはそう聞いていた。少なくとも十七歳の連中ならばそれができるのだった。しかし、彼らはぼくらに比べて決定的な一歳上という強みをもっていた。デヴォン校でぼくらの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c